



Data

監督：マイケル・ショウォルター
出演：クメール・ナンジアニ/ゾー
イ・カザン/ホリー・ハンター
ー/レイ・ロマノ/アヌパ
ム・カー

■ショートコメント■

◆わずか5館の上映から始まった「あるカップルの実話」が全米を虜にして大ヒット。第90回アカデミー賞の脚本賞にノミネートされるまでに至ったのが本作だ。主人公はパキスタン人のコメディアンであるクメール（クメール・ナンジアニ）で、シカゴの大学院に通う女子学生エミリー（ゾーイ・カザン）とうまく付き合っているようだが、ハタ目には文化の違いが顕著だから、2人は本当に大丈夫・・・？

また、クメールの芸は日本でいう一種の「漫談」だが、パキスタン色がめっちゃ強いそのネタは本当に面白いの・・・？

◆友人と共に、クメールが出演する「高座」(?)に参加したエミリーが素っ頓狂なヤジ(?)を発したところから、2人は意気投合。なんと、その日のうちに相棒と一緒に住むクメールの部屋で、たちまち一発！そんな展開って、本当にあるの・・・？

◆『ゲット・アウト』（17年）が第90回アカデミー賞の作品賞と監督賞にノミネートされたのはちょっと意外だったが、そこでは白人の女の子が恋人の黒人男性を自宅に招待したことによって起きるハプニングとドタバタ劇がテーマになっていた。

黒人男性との恋愛と、パキスタン人という異民族・異宗教の男性との恋愛のどちらがより問題が大きいのかは知らないが、白人の娘を持つ両親にとって、娘がそんな男と付き合い始めたら大変。表面上は平静を保っても、さてその胸の内は・・・？

◆『ゲット・アウト』と同じような展開を私は予想したが、本作中盤ではある日エミリーが予想外の奇病(?)に倒れ、昏睡状態に陥ると、その後ストーリー展開の中心はエミリーの父親テリー（レイ・ロマノ）と母親ベス（ホリー・ハンター）VSクメールの奇妙なバトルになっていく。救急車を呼びエミリーの側に付き添ってくれたクメールに対して両親が感謝したのは当然だが、それ以上のお役目は無し。「はい、ありがとう」「では、バイ

バイ」のはずだったが、本作中盤はそれとは違う全く意外な展開になっていく。なるほど、なるほど、これがアカデミー賞脚本賞ノミネートの理由なのか？そう納得したものの、やっぱりちょっと不自然な感も・・・。

◆第153回芥川賞を受賞した又吉直樹著の『火花』を映画化した『火花』（17年）では、夢を追う2人の若い芸人の生きざまがテーマだったが、本作でもパキスタン人であるクメールが見せるアメリカで芸人として成功したいと願う気持ちは相当なもの。そのため、エミリーが奇跡の回復を果たした後は、クメールとエミリーの恋仲の復活の有無という興味のほかに、ニューヨークに進出したクメールの芸人としての成功の有無という新たなテーマが生まれてくるが、さてその展開は？

もちろん、それを本格的に描けばもう一本別の映画を作らなければいけないから、そのまとめ方は難しいが、本作はそれが実に良くできているので、それに注目。もっとも、本作は当然ながらハッピーエンドで終わらせているが、それはあくまで映画ならではの話。もしこの話が実話だとしたら、この2人のその後の現実は・・・？

2018（平成30）年2月28日記